

第2節 おにてながえび養殖

オニテナガエビ *Macrobranchyum rosenbergii* は東南アジア原産で、同地域の河川、湖沼および汽水水域で流れの少ない所に生息している。わが国には1967～1968(昭42～43)年に導入され、大学や2、3の研究機関で飼育、再生産された¹⁾。

指宿内水面分場の小山場長によると、本県では1973(昭48)年に指宿市において富士エンタープライズ(株)が種苗生産を始めたのが始まりで、指宿内水面分場でも1974年から試験飼育を行ったが、企業化の目処がたたず断念した。この会社も種苗転換を図ったが、数年で種苗生産を中止した。

その後1984(昭59)年に郡山町の臼井氏が専門的に養殖を始め、年間約4トンの生産をあげるまでになったが、バブル崩壊とともに廃業に追い込まれた。その他に南種子町、佐多町では地域興しの一環として、休耕田を利用した養殖が行われたが、養殖期間が5月から9月までと短く、予期した収益があがらず、大部分は数年で中止している。現在は、南種子の十数人が、副業として小規模経営を行っている。

課 題

聞き取り調査の結果、種苗生産技術や養殖技術にまだ問題があり、技術研修や業者の情報収集等が必要である。オニテナガエビ養殖は温水が必要であり、面積当たりの生産量は他魚種に比較して非常に少ない。したがって高価に販売しないと収益が出ない側面を持っている。商品的価値はあるため、養殖方法次第では、特産品としての需要も期待される。

参考文献

- 1) 丸山為蔵・他(1987): 外国産新魚種の導入経過。水産庁研究部資源課・養殖研究所。

(小松 光男)